

川端康成「十七歳」論

——妹の悲しみの内実——

劉 文娟

序

川端康成の小説「十七歳」は「わかめ」「小切」と併せて、「文芸春秋」第二二巻第七号（一九四四・七）に「一草一花」という総題のもとに発表された。後に『朝雲』（新潮社 一九四五）に初めて収められ、それ以後の全集に収録された。¹「十七歳」は「わくろ」²（新潮）第四〇巻第五号、一九四三・五）、「わかめ」「小切」など戦中に書かれた掌の小説とともに「それぞれの環境で銃後を守ってひたむきに生きる日本の女たちが、共感をこめて描かれている」作品として評価され、「康成の戦中の心情、戦争に寄せる関心を探るのに見逃せぬ作品」³だとされてきた。しかし、その実態は未だに明らかになっていない。本稿では、作品解釈の鍵と思われる妹に焦点を当てて考察を行う。まず「イヤデスさん」が呼び起こす一七歳の妹の悲しみを読み取る。そして、その悲しみが深化していく過程においての妹の精神的成長と心境の

変化を解明する。さらに、戦争を背景とする姉と妹の対照的な姿、「イヤデスさん」と「オツカア」の意味など多角的な視点から分析し、一七歳の妹の悲しみの内実を明らかにしたい。

一、妹の悲しみ

まず、この作品がある一七歳の少女・妹の十年前の思い出から始まっていることに留意したい。

銀杏が落ちてゐるからといふ妹に誘はれて姉も寺の庭へ行つてみると、銀杏の木蔭の地蔵堂に貼紙をして、「ここで遊んではいけません」と書いてあるのが眼についたが、よく見ると、その墨の字の横に薄い鉛筆で、

「イヤデス」と子供の字があつた。それを書いたのが妹だと分ると、姉はあわてて、連れて帰つた。家で叱られてから妹もこはくなつて、寺の庭へはもう遊びに行けなかつた。

妹は寺の警告の貼紙に「イヤデス」と書くような、素直で無邪気な子供である。大坪利彦は「無邪気なある面では放恣ともいえる反抗の出来ることが子どもの特権であ」^④ると述べている。小説の冒頭に、この「イヤデスさん」と呼ばれる妹の十年前の思い出を置くのは、重要な伏線だと考えられる。

妹は現在病床に伏している。病院から姉に手紙を出そうと考へ、鉛筆を削っている。そして、白い敷布に吹き飛ばされた「鉛筆の心」を小さい蟻が一心に運んでいることに気付く。蟻の行動を「見つめてゐるうちに、自分が蟻の小さい体になつて敷布の広さが感じられて来た。白い布が雪原か氷原のやうに思はれた。なにか悲しくなつた」。ここで「雪原」「氷原」と語られる空間の広がり、身に沁みる冷たさを感じさせる。病氣のために感傷的になっている妹は、無限の空間の中で、卑小な営みを続ける蟻に自己を投影し、寂しさ、無力感を味わい、悲しくなつたのである。

病氣してから些細なことにも涙脆いが、その感傷が子供っぽいばかりでなく、感傷に誘はれて子供のころを思ひ出し勝ちだつた。そしてそれに気がつく度に、自分の年が分らなくなつてしまつたやうな、年齢のよりどころを失つてしまつたやうな不安を感じた。十七の今年まで、自分の年を真面目に考へてみたことはなかつたが、初めて考へてみると、自分は大きくないでゐるのかしらと恐かつた。

「感傷に誘はれて子供のころを思ひ出し勝ち」なのは、病院という一時的に外界との連絡が遮断された空間で、自己の内面に向かわざるをえなくなっているからだと考えられる。雑多な日常生活空間よりも孤立した純粹空間の中にいる人間の方が、自己を凝視する機会が多くなりがちである。病院はまさにそのような「純粹空間」^⑤だと言える。妹はそこで自らの孤独と向き合い、「自分ひとり時間の外に置き去られたやう」に感じている。それゆえに「自分の年が分らなくな」り、「年齢のよりどころを失つてしまつた」のである。つまり、この時点において、妹の「時間」が止まつてしまつたのである。妹の悲しみは病氣になつた少女の感傷によるものであるという一面もあるが、一時的に外界と遮断された空間の中に置かれてゐるからこそ、自覚させられるのである。鶴田欣也は、川端文学の特徴の一つとして、登場する女性たちが「社会の制約からはみ出るとき、生命の痛みが一層強く感じられる仕組」^⑥を指摘している。「十七歳」の妹も、入院することにより、世間に汚されることなく、純粹無垢でいることが可能になる。その純粹無垢は「雪原」「氷原」の白さによって象徴化されている。

かつて母が見舞いにきた時、「昨夜庭へ出てみると、もう梅干に夜露がおりてゐてね」と何気なく話した。「梅干に夜露がおり」^⑦ることは時間の流れを感じさせ、また病室の外の生活を意識させる。病室の中では止まつてゐるよう感じられる時間が変わらず流れつづけているのだと気付かせる母のその言葉が、「妙に」妹

の「胸に迫つて来たりした」。一方、日常の食生活に欠かせない「梅干」がまた妹にその時間の流れに生きている人間を思わせるだろう。「下の妹」もいつのまにか物を惜しむようなことをするようになっていく。妹は「つまむとくづれてしまふ灰を一心に拾う」「下の妹」の姿に一生懸命に生きていく人間の空しさを見ている。また「夜露」からは夜の冷たさを感じ取り、人間をいとおしく思うような、哀れむような感情が湧いてきており、「人々の寝静まった町が感じられた」のである。

では、妹の悲しみは単に病室にいる少女の感傷から来るものだろうか。「休ませていただきます。」と言ふと涙が出た」「戦争中なのに、かうして病人として休ませてもらふ、大きい感謝だった」というような感情はどう理解したらいいのか、妹にとって一七歳はどのような意味を持つのか、その内実を分析・考察したい。

病人として休んでいる妹は「自分は大きくなれないでゐるのかしらと恐かつた」。そして、自分の行動の「子供っぽさ」が気になつていく。妹にとって「大きく」なるとは何を意味しているのだろうか。

作品が発表された一九四四（昭和一九）年時点で数え年一七歳だとしたら、妹の生まれ年は一九二八（昭和三）年になる。すると、妹が三歳の時に満州事変、九歳の時に日中戦争、そして一三歳の時に太平洋戦争が引き起こされたことになる。つまり、妹は、物心のつく頃から一七歳の現在に至るまで、戦争の時代の中

に生きていたことになる。

一九三八（昭和一三）年には国家総動員法が公布され、若年層の勤労奉仕も行われていた。太平洋戦争勃発から二年後の一九四三（昭和一八）年に入ると、銃後の生産活動を支える労働力は一段と不足した。この年、学徒の勤労動員が始まり、九〇万の学徒が軍需工場に徴用されるようになった。学徒と並んで、労働力の供給源とされたのが未婚の女性である。同年九月、政府は女子挺身隊を編成し、一四歳から二五歳までの未婚・無職・不在学女子に対し、一年ないし二年の長期にわたる勤労奉仕を義務づけた。一四歳以上の未婚女性は婦人会などを単位として、新規の女学校卒業生は同窓会単位で、軍需工場や農繁期の農村に送り込まれた。この動きは一九四四（昭和一九）年の学徒勤労令や女子挺身隊令の公布によってさらに徹底され、国民学校高等科、中等学校低学年にまで動員が拡大し、中等学校三年生以上の男女には深夜労働まで課された。同年の「朝日新聞」にも、女学生の病院などへの挺身や生産工場への繰り込みに関する記事が見られる。^{⑥⑦}

妹が義務教育を受けたことを前提として考えると、一九四〇（昭和一五）年に尋常小学校を卒業していると推定できる。そして、一九四四（昭和一九）年の学校系統図を参照すると、数え年一七歳（満一六歳）は、ちょうど高等女学校を卒業する年であることが分かる。妹が高等女学校へ進学したか否かは作品から判断しにくい^⑧が、一九四三（昭和一八）年以降、動員の範囲が次第に広がり、一九四四年に入ると、学徒、女子とにかかわらず戦争体

制に組み込まれることは免れない。一七歳の妹も、病気をしなければ、労働力の供給源とされた「未婚の女性」として真っ先に動員され、軍需工場や農繁期の農村に送り込まれ、戦争生活に溶け込んで働かなければならない立場であると考えられる。

このような背景のもとに、病気になり、勤労働員から除外されている妹は、ただ感傷的で何の役にも立たない自分のことを「子供っぽい」「子供みたい」「大きくなれないでゐる」と感じている。「病人」として休ませてもらふ、大きい感謝」というのも、現代からは過剰とも思えるが、戦時を生きる人間ゆえの感情として理解されるものだろう。

今も蟻と遊ぶやうな子供つばさの後で、なにか悲しくなると、年齢の階段みたいなものをことごとく踏み外したやうで、眼をつぶつて横になつた。鉛筆の心なんか運んで行つてと蟻に話しかけようとしても、自分の方が先にさびしかつた。

(傍線―引用者・以下同)

自分が役に立たない人間だと思い、蟻に積極的に声を掛けることさえできない、自己の「さびし」さに閉じ込められている妹の心境である。

当時、「多くの国民が日米開戦に不安を抱いたが、ことの重大性に気づく人は少なかった。物質窮乏とインフレに苦しみながらも、市民はよく働き、「欲しがりません勝つまでは」のかけ声に

従順にこたえていた」^①のである。妹が「イヤデスさん」と揶揄された十年前は、まだ子供が「イヤデス」と口に素直に出すことができていたが、戦争が進む現在、もう誰も「イヤデス」と言えないようになり、戦争に勝つまで我慢するしかなくなる。国民全体が国家総動員体制に巻き込まれ、「大東亜戦争」に猛進するなか、いわゆる個人の哀歓が否定されている時代において、妹は「現在の資格に欠けている」人間だと言えるが、入院してそのような状況の外にいる自己の内面にあらがひ、同時代に生きている人間を、自分とは異なる存在として意識するのである。妹の悲しみは、病室にいるからこそ生まれる戦争中の人間に対する憐憫であり、同時代の一般的な一七歳の女性の実態から遊離することによって生まれた純粹な感傷ではないだろうか。

二、妹の成長——(悲しみ)の深化

妹は妊娠した姉が見舞いにきた時、母からもらったという「四つで死んだ上の姉の晴着」を見せられた。

「でも、男の子か女の子か分からないでせう。」と妹は言つた。

「女の子らしいわ。」と姉はあつさり片づけた。

「私の様子を見ても、女でせうつて、お母さまもおつしやるのよ。うちは女の子がよく産れるし。」

「そんな死んだ人の着物着せていいの。」

「平気よ。今時そんなこと言つてられないわ。よその人のならいやでせうけれど。」

「今時、そんないい着物、目立つて。」と妹は言ひかかつて、着物を惜しがつてゐるやうな、姉を妬んでゐるやうな自分にとびつくりした。

小さい頃「上の姉」のことについて、お互い「感傷の相手」として付き合つてきた姉妹にとつて、「上の姉の幼い晴着」は「大事なもの」である。母からその「晴着」をもらった姉に対して、その着物をこれから生まれる子供に着せるのがいいことなのだろうかと「妹」は言いかける。そして、「着物を惜しがつてゐるやうな、姉を妬んでゐるやうな」「自己の感情を不思議に思うのである。姉が母からその着物をもらうと、いままで姉と二人で精神上共有していると思つていたものが、完全に姉のものになつてしまふ。その時、嫉妬の気持ちが生まれたのである。それは妹が「上の姉の晴着」を二人の間の大切な記憶の名残りとして見てゐるからだと言つていいだろう。

紅白の乱れ鶴の小袖、朱に金の菊の浮き出たちやんちゃんこ、紫に白牡丹を染め抜いた被布、緋縮緬の長襦袢、妹は一目で分つた。

妹が「一目で分つた」晴着は「朱」「金」「紫」「白」という鮮やかな色合いと、「乱れ鶴」「菊」「牡丹」などの華麗な文様を持つてゐる。妹は「今時そんないい着物、目立つて」と姉を妬んでゐるように言つてゐるが、「今時」とはどのような状況だろうか。戦時下、生活必需品のなかでもっとも早く欠乏したのが衣料品だつた。原料の大部分を輸入に頼る繊維製品は、日中戦争開始直後から不足していた。一九四二（昭和一七）年二月、一般国民に最低限の衣料品を保障し、軍需方面の配給を確保しようとする「衣料品総合切符制」が実施された。男は戦闘帽に国民服、女は袂を落した筒袖にもんべが決戦下の画一的な服装となつた。「当時の子どもで、つぎの当たつていない服を着てゐる子は少なくなつた。ズボンのひざも、洋服のひじも袖口も、つぎ当てがしてあつた。傷んで着られなくなつた大人の服の生地を工夫して、子ども服を作ることゝ推奨された」^①。「今時」は「ぜいたくは敵だ」^②が叫ばれ、衣類などが配給制となり、国民服や決戦服が奨励される時代であり、色鮮やかで華やかな着物を子供に着せることは一般的ではない。時勢に合わないのである。

「こんどはね、赤ん坊にこの着物を着せて来るかもしれないわ。丈夫になつてらつしやいね。お前がこれを孫に着せておくれたら、さつぱりして、あの子もたつしやになるでせうつて、お母さまがおつしやつてらした。お母さまつて、大変なことを考へるものだと思つたけど、ありがたいものよ。」

姉の「こんどはね、赤ん坊にこの着物を着せて来るかもしれないわ」という言葉の裏には、戦争が早く終り、「晴着」が着られるような豊かな生活が早く訪れるようになってほしいという祈念が込められている。そして、母は「父母の悲しい秘密」が載せられた死んだ姉の「晴着」を、新しい生命に着せることによって、この家庭からも暗い歴史や不祥なことが祓われ、明るくなれるだろうと信じており、すべてが「さつぱりして」、病床に伏している妹も「たつしやになる」だろうと願っている。姉はそれを「大変なこと」だと素直に受け止め、また「ありがた」くも思ったのである。母や姉にとつて、「上の姉の晴着」は、今の生活を耐え抜いた後の明るい未来を意味している。

三、妹の心境の変化

ただ「子供つばい」自己への感傷に閉じ込められ、「自分がなにも分つてゐない」と自覚したからである。母や姉にとつて、亡くなった「上の姉」の晴着には家族を思う母の祈念がこれほど込められているのかと、姉に対する嫉妬も恥ずかしく思うのである。自己の偏狹を意識するとともに、姉に対する理解を改めたが、それゆえにかえつてまた悲しみも深まった。しかし、ここには妹の精神的成長が見られる。母や姉の「生き方」にも、蟻の一生懸命にも、生へ向かつて進み、時代を生き抜く堅忍があるのであるかと、「小さい蟻さへ分らない」自分に気付いたのである。

妹は涙が噴き出して来て両手で顔を隠した。姉があわてて、それから病気のせるにして叱るのを妹は案外落ちついて、ただ愛撫と感じてゐた。清々しいばかりだった。

しかし心が洗はれるにつれて、なほせつなく悲しいのは、自分がなにも分つてゐないといふことだった。母や姉さへ少しも分つてあげられないといふ愛情の身悶えだった。母や姉の生き方を抱かうとしても、手がかからなくてはたりと倒れ、逆に子供みたいに抱かれてゐる自分を見るだけだ。小さい姉さへ分らない。

妹は「涙が噴き出して来て両手で顔を隠した」。それは今まで

前章では妹の悲しみの深化をあきらかにしてきたが、ここからはそれを踏まえつつ、結末に至る妹の心境の変化をさらに詳細に見ていきたい。まず、「姉の生き方」が妹の目にどう映っているかに着目する。

「子供ね。病氣にあまえてちやだめよ。」と姉は妹を見据えて、その止まった眼に妊娠の疲れが出たけれども、ほんの瞬間だった。(中略)

「オツカアといふのは私のことなのよ。オツカアと言ふと、なにかどんと据ゑつけたものみたいで、妙な気がしたけれど、兵隊さんはさういふらしいわ。」と言ひながら眼を離さ

なかつた。妹に姉の肩が触れてゐた。ずるぶん久しぶりのことで妹は胸がどきどきした。筒抜けに姉が流れこんで来て、どうなるのかと思つた。

しかし姉は不意に伸び上ると少し離れた椅子に坐つて、なにか用がすんだといふやうな顔で妹の方を眺めた。うつ向いたのが苦しくて一服してゐるのかと、妹は気がついた。

「妊娠の疲れ」が姉の目付きや無意識な動作から流れ出たが、「ほんの瞬間だつた」。現実にかかる様々な苦しみを気にせず、過ぎ去つたものにも拘らず、刻々とまわってくることを精いっぱいやる。それは姉のさっぱりした性格の一面でもあるが、現在の生活に専念することによって日常を朗らかに生きている姿でもある。妹はそれに気付くと同時に、久しぶりに姉の肩に触れることで「胸がどきどきした」。妹にとって、用のない「子供っぽい」自分に対し、姉は大人として憧れの存在である。姉が近づくと衝撃が大きく、妹は自分の存在感が薄らいだように感じられる。そうした状況の下、姉が一気に迫ってきて、妹は自分の存在がなくなるだろと心配するまで刺激を受け、胸が騒いだのである。

姉は戦地の夫から送られた写真に「オツカア」と書かれた自分のことを「なにかどんと据ゑつけたものみたいで」、「妙な」気がすると言ふ。「据ゑつけた」という表現をどう理解したらいいのか。

川端は一九四二年一〇月、日本文学報国会派遣作家として長野

県の留守農家を訪ねている。その後エッセイ「日本の母」^⑤を書いた。その作品では、戦死した夫を持ち、「日本の母」に選ばれた三十代の女性井上ツタエさんの姿が次のように描かれている。

頬の赤い、大作りの面長に、豊かな体で、三十四といふ年より若く見えた。しつかり据つた重みのうちに、温かいものをじつと蓄へた姿だつた。明るい農婦だつた。

「日本の母」はツタエさんのような素朴純情で、一心不乱に百姓仕事をする普通の婦人である。川端は「かういふ無名の母達によつて、銃後はまもられてゐるのである。戦線の勇士達が呼ぶのも、かういふ母達である」^⑥と思ひ、その姿を書き留めたのである。いつまでも明るさを失わず、強さを持つ女性に「据つた重み」を見ている。

そして、川端が同時期に発表した掌の小説「さと」^⑦の結末には、次のように書かれている。

兄の戦地からの手紙を見せようと立ち上がった嫂の後姿に、絹子はふと嫂の年、しかしこの家の人になり切つた、据つた重みを感じて、はつとした。

小説「さと」の主人公絹子は実家へ里帰りして、以前嫂が里帰りした時のことを回想する。母は嫂の里帰りを「この家になじん

でない」証拠だと嘆いたが、絹子は逆に嫂に同情し、嫂へ理解を示している。それから四年後、兄の戦地からの手紙を見せようと立ち上がった嫂の後姿に、絹子はふと「この家の人になり切つた、据つた重みを感じて、はつと」するのである。森晴雄⁽⁸⁾は男たちが出征したあとの、家庭での女達の姿が、この一節に表れていると指摘した。嫂の「据つた重み」が身に付いた四年の歲月は、日本の戦争とともに流れている。嫂は戦時中の日本の女性の一つの縮図だとも言える。

嫂と同じように、姉の夫も戦地へ出征している。そして姉は戦地にいる夫に「オツカア」と呼ばれている。その呼び方には「兵隊さん」たちの銃後への信頼や安堵感が込められており、さらに戦地に身を置く彼らの精神的な支えになっている「母」の意味も含まれている。姉は「なにかどんと据ゑつけたものみたいで、妙な気がしたけれど」、自らを「オツカア」と呼ぶ夫の気持ちをくみとり、「眼を離さなかつた」のである。

「お姉さま、お産にも帰らないの。」

「ええ、帰らないつもり。オツカアの亭主が留守だから、帰らない方がいいやうよ。」と姉は笑つたが、ちよつと思ひ出すやうな風をして、

「私達、なくなつた姉さんの名前、まだ聞いてないでせう。私に女の子が産れたら、知らん顔して、姉さんの名をつけてみようかしら、お父さまやお母さまを驚かせてあげる、そん

なこといつかあなたに言つたことあるわね。覚えてる？ でも、そんな名前を聞かなくてよかつたわ。子供の名前は、そんな少女の感傷でつけられるもんぢやないことよ。戦地からつけてもらふわ。女の私の気持で、子供の名前は犯せない。」

姉は出産の時にも実家へ帰らず、「亭主が留守」である家をしつかり守ろうとする。その姿は「日本の母」のツタエさん、「さ」との嫂の姿に重なり、「据ゑつけたもの」の意味を自ら体現している。かつて自分に女の子が生まれたら、亡くなつた姉の名前を子供につけようと、妹とともに「少女の感傷」を共有していたが、いつのまにか変化した姉には、時代の影響が見られる。過去に拘りを持つ妹と、状況と呼応する姉との対照的な姿が見られる。子供に自らの思い出にまつわる暗い影を背負わせたくない。いつの時代でも遅く生きられるような子供に育つてほしいと、子供の名前を「戦地からつけてもらふ」のはそのことを如実に物語っている。

掌の小説「小切」⁽⁹⁾において、主人公美也子は友達が産まれた時からの着物全部の小切れを、写真帳のように貼つて残してあることを羨ましく思った。その話を聞くと、母は感心して「美也子のも取つておけばよかった」と言つたが、傍で聞いていた父は「いやなことをする。平民のすることじゃない。」「なんだ。そんな子供はよう大きくならんぞ。」と怒つた。そんなことを思い出し、

美也子は父がなにを怒るのか分らなかったが、今は少し分るような気がする。思ひ出にあまえてはならない。過ぎゆくものにひつかかったり、とらへようとしてはならない。もつと大事なことは、美也子の小切には暗い影が一つもまっはつていない。平凡だけれども清潔で幸福な思ひ出ばかりだ。あの友達の美しい小切には、あの子か母かの汚辱と不幸とがしるされてゐたかもしれない。悲しさを大事にしてゐたのではないだらうか。

との一節がある。美也子は過去の不幸を背負い、その「悲しさを大事にして」はならないと考えている。それは「子供の名前は、そんな少女の感傷でつけられるもんぢやないことよ」と口にする姉の思いと軌を一にしている。

さて、ここで同じ片仮名表記である「オツカア」と「イヤデスさん」という二つの呼称に注目したい。「オツカア」は変化した姉に対する呼称で、そこには時代の影が射している。一方、妹は「病院から姉に出す手紙に「イヤデスより」と署名しようと考えつた」。そして、鉛筆を削っているうちに、「折れた心」が眼に入つたかと思うと、敷布に動いていくのだと分かつた時、「まあいやだ。」と何気なく言つた。十年前、寺の貼紙に「イヤデス」と書いた子供を彷彿とさせる。それは妹が「イヤデスさん」の持ち続けている時間に止まつたまま、「成長」していなかったことを意味する。そうすると、「イヤデスさん」という呼び方には、

「いやです」と素直に言えない社会状況と、妹の個人的「成長」とに關わる二重の意味が含まれているのではないだらうか。

妹は子供の名前を戦地からつけてもらふという姉の話を聞いて鎮き、それから晴着を孫に差し出す母の思いを理解し、清々しく涙を流している。心が洗われるように感じながらも、病氣のため母や姉のように生きられず甘やかされている自分に氣付く。その氣付きは次のような小説の結末部分に繋がる。

けれども、こんなに溢れて来る心は天にもとどきさうで、義兄も産まれる子もみんなきつと護つてあげると、遠くへ掌を合はせる氣持になると、生き生きとありがたかつた。

「何も出来ない体だけれども、ただもういい人になつておかうと素直に」思う氣持から、「こんなに溢れて来る心は天にもとどきさう」「みんなきつと護つてあげる」と「生き生きありがたく思う妹の心境の変化が窺える。つまり、妹は消極的な一七歳の感傷から脱出し、家族みんなを護りたい、祈りたいという未来に向けた積極的な感情を持つように変化したのである。

戦時中、病床に伏している妹は感傷的になり、十年前「イヤデスさん」と呼ばれた自己と姉や母との過去を追憶し、入院時にと自分の年を正確に把握できなくなる。それは妹が病院という一時的に外界と断ち切られた空間に置かれ、「自分ひとり時間の外に置き去られたやう」に感じるからでもあるが、国民の戦争協力

が要請される中で、一七歳の国民として国家に献身しなければならぬ立場でいながら、勤労働員から除外され、ただ感傷的で何も役立たぬ自己を「子供みたい」「大きくなれないでゐる」と感じるところから生まれた年齢感の齟齬でもある。

妹は卑小にもかかわらず孤軍奮闘している蟻に自己を投影し、悲しみを味わう。その悲しみはまた戦争中の人々に対する憐憫に重なり、「休ませていただ」くことへの感謝の気持、「ただもういい人になつておかうと素直に思ふ」ものへと深まっていく。そのような妹の「なにも出来ない」消極的な(内的)感情は姉の見舞いを契機に積極的(外向き)なものになつていく。姉が見せてくれた四つで死んだ「上の姉」の晴着には、戦争が早く終り、豊かな生活が早く訪れるようにという祈念が込められており、また「オツカア」という義兄の姉に対する呼び方には、戦地にいる兵隊たちの精神的な支えになつていく母性的な存在感が示されている。姉の、時代に溶けこんで、「生」へ向かい懸命に生きていく「生き方」に気付く、妹は自分の世界の狭さを意識しながら、家族をいとおしむ心が溢れ、遠くへ合掌して家族みんなを護りたいと思う「生き生きとありがた」い気持になるのである。

掌の小説「十七歳」において、きわめて日常的な生活場面には、戦時の国民の「真実」が紡がれている。若年層が勤労働員される状況下で、病人として休ませてもらう感謝の気持、衣料品が不足していて、その結果として着物が目立っている現状、「いやです」と口に出さず、社会の変化に逆らうことなくひたすらに銃

後の生活を営んでいる女達などが、それとしてあげられる。

一方、作者川端の視線は病氣療養中の一七歳の少女に向けられている。妹の「成長」過程には戦時下の社会状況から一步踏み外したところから生まれた悲しみの心情が通底している。その悲しみは人間本来の「常」が奪われ、個人の感情が抹殺されている時代のなか、人間の心のあり方、純粹さが如何に大切かと気付いた作者の意識として描き出されている。

結

作品の題名である「十七歳」の意味について考えていきたい。川端は数え年一六歳、満年齢で一四歳の時に書いた日記をもとに、小説「十六歳の日記」を執筆した。この作品は、初出の時に「十七歳の日記」「続十七歳の日記」と題された。しかし、『伊豆の踊子』に収録される際に、妻の秀子が「年の数え方が違うのに気がついた」ために、改題されたのである。また、小説「故園」において、主人公の「十六七歳らしい自己嫌悪に落ちた」記憶が語られている。一七歳は、死を間近に控えて日に日に弱っていく最後の肉親である祖父への少年らしい愛情と嫌悪感に繋がっており、作品中分水嶺となる年齢として設定されている。

主人公が男性である場合の一七歳は、川端の孤兒体験による精神構造(孤兒根性)に繋がっている。一方、女性である場合の一七歳は、むしろ川端の伊藤初代(千代)との失恋体験や女性観に

影響される側面が強い。「川端の胸奥に象嵌された千代の像は、聖処女として魅力を残像させる」と長谷川泉が述べているように、川端の作品には、生涯にわたって、「永遠の少女」像が託された人物が登場している。千代をモデルとする「篝火」の主人公みち子の後姿は「小娘でも女でもなく、ただ頼りなげに背丈を高く見せた」と描かれ、「まだ子供なんだ」「さつきの女学生達よりもずつとずつと子供なんだ」「全く、まだ物の形も見えないこの十六の小娘をどうするのだ」と「子供」に強く拘っている作者川端の意識が見られる。「伊豆の踊子」の冒頭部分で、「私」が踊子に巡り会った時、「不思議な形」の髪型をしている一四歳の踊り子は「十七くらゐに見えた」。踊り子が「汚れる」だろうと悩ましかった翌朝、浴場の真裸の踊り子を見て「子供なんだ。私達を見つけた喜びで真裸のまま日の光の中に飛び出し、爪先きで背一ぱいに伸び上る程に子供なんだ」と髪と衣裳に騙された自分に気が付き、清々しい気持になっている。「踊子の髪が豊か過ぎるので、十七八に見えてゐた」のである。「私は前々から十六七より年上の女にはなんの魅力も感じないといふ病的な好みに捕へられてゐた」と語られているように、「十六七より年上の女」はおそらく自己の精神を清めるような純粹無垢な「子供」ではなくなり、「魅力」も感じられなくなるのである。作者川端にとつて、一七歳という年齢は女性が「子供」から「娘盛り」を経て女へと変わっていく境界線として強く意識されている。

川端康成は作品発表直後の一九四四年六月一五日の自由日記

に、自分の心情を次のように書き記した。

午前二時。明朝の飯を焚いて置けとは、明朝の万一を予想しての事である。明朝爆撃を蒙るものとすれば、敵機は現在機翼を連ね爆音を轟かせて、闇夜の空を我等に向つて飛来しつつある筈である。「故園」の祖父の夢に就ての下りを書きながら、ふとこの敵機を思ふと、現在なるものの奇怪を感じる。現在なるもの、我等の生命は常にかくの如きものであらう。防空要員でない私は今夜今時、明後日朝メ切の仕事を一途にする外に、我等に襲ひ来る敵機に対してなすべき事が無い。防空要員でない一般の人々はただ眠りに入つてゐるであらう。私も安眠してゐるべきである。人並に眠つてゐるべきであると、真実思ふ。奇怪な「現在」である。「故園」の四枚目を書いてゐる。

「刻々の現在とは無論刻々の過去である」といふところへ来て、この感あり。

空襲の下、戦時中の生活者として国家と共棲しなければならぬ運命のなかで、偽りの「夢」を仮託する。そうした表現に「我等の生命は常にかくの如きものであらう」と、「現在」に同調しない「現在なるものの奇怪を感じる」という川端の違和感がある。それは戦争の現実（時代）が人間にもたらしてきたものであって、一七歳の「イヤデスさん」の悲しみの中にもあり、姉と妹

との対照的な姿の中にも見出される。「明後日朝メ切の仕事」という目の前のことを「一途に」するしかない。「蟻」のように「生」へ向かって「現在」を生きるべきだという川端の心境も窺える。小説「十七歳」はまさにそのような作者の心境が表れた作品である。

注

- (1) 作品「十七歳」は『川端康成全集』（全一二巻）第六巻（新潮社 一九六〇・九）、『川端康成短篇全集』（講談社 一九六四・二）、『川端康成全集』（全一九巻）第六巻（新潮社 一九六九・一〇）、『川端康成全集』（全三五巻）第一巻（新潮社 一九八一・一〇）に収録されている。
- (2) 森本穫「『住吉』連作論——『反橋』から『隅田川』まで——」（川端康成研究叢書7『鎮魂の哀歌』教育出版センター 一九八〇・四）
- (3) 武田勝彦「十七歳」（『川端康成全作品研究事典』勉誠出版 一九九八・六）
- (4) 大坪利彦「十七歳」について」（『論集 川端康成——掌の小説』おうふう 二〇〇一・三）
- (5) 鶴田欣也は「伊豆の踊子」（『川端康成の芸術——純粋と救済——明治書院 一九八一・一一）において、「清純とは世間の汚れが身体や気持に染みついていないこと、生存の狡猾さを知らぬことを意味する」と言い、「川端文学で
- は清純と社会的抑制とは密接な関係」にあり、女性達が自分の清純を投げうつとき、また、社会の制約からはみ出るとき、生命の痛みが一層強く感じられる仕組になっている」と述べている。
- (6) 太平洋戦争研究会編・水島吉隆解説「写説 戦時下の子どもたち」（ビジネス社 二〇〇六・一二）による。
- (7) 「病室も明るい教室 看護婦免状戴く前にもう挺身」（『朝日新聞』夕刊 一九四四・二・九）、「続々戦列へ 女学生部隊も近く出勤」（『朝日新聞』朝刊 一九四四・四・一六）などである。
- (8) 「写真で見る教育百年史」（日本図書センター 二〇一四・六）
- (9) 「昭和時代 戦前・戦中期」（読売新聞昭和時代プロジェクト 中央公論新社 二〇一四・七）
- (10) 逸見広「七月創作評」（『早稲田文学』一九四四・八・一）
- (11) 注（6）に同じ。
- (12) 一九四〇（昭和一五）年七月七日には「奢侈品など製造販売制限規制」（通称七・七禁止令）によって、いわゆるぜいたく品の販売が禁止された。八月一日には国民精神総動員本部が東京市内に「日本人ならぜいたくは出来ない筈だ！」「ぜいたくは敵だ！」など書かれた立て看板を千五百本配置した。
- (13) 川端康成が一九三四（昭和九）年一月一日付「福岡日日

新聞」の朝刊紙上に発表された小説「令嬢日記」において、主人公朝子に「晴着」一枚を買うにも「一家の争ひがあつた」。「戦争が起つてみる、戦争が。人目に立つやうなものを、びらびら着て歩けるか」という父の一言で、母娘が「びたりと黙る」場面が描かれている。戦争が起きると、晴着が着られなくなるような状況が設定されている。

- (14) 『川端康成全集』(一二／一九／三五巻本)において、すべて「姉」になっている。しかし、初出、初刊ともに「蟻」となっており、文脈からここは「蟻」の方が適切である。明らかに全集の誤植だろう。本稿でも「蟻」として考察を進めている。以降の引用もこれにより「蟻」とした。

- (15) 川端康成「日本の母」(読売報知 一九四二・一〇・三〇)

- (16) 川端康成「日本の母」を訪ねて」(婦人画報 一九四二・一一)

- (17) 川端康成「さと」(写真週報 一九四四・一〇・一八)

- (18) 森晴雄「『さと』―据った重み」(『川端康成『掌の小説』論「貧者の恋人」その他」龍書房 二〇〇〇・一一)

- (19) 川端康成「小切」(『文芸春秋』第三二巻第七号 一九四四・七)

- (20) 大坪利彦は前掲の論文において、「十七歳というのは、十四や十五歳と差異の体系によって指示されて」おり、「女

性」と十七歳との観念連合が代替しがたい意味を生み出している」と指摘している。本章は大坪の指摘を踏まえ、「掌の小説『十七歳』が十六あるいは十八と差異化されてなぜ十七なのかという素朴で率直な問いかけ」についてさらに追究しようとするものである。

- (21) 川端秀子「川端康成とともに」(新潮社 一九八三・四)

- (22) 川端康成「故園」(『文芸』一九四三・五―一九四五・一)

- (23) 伊藤初代(別名 千代、一九〇六・九・六―一九五一・二・二七) 川端康成の元婚約者。数え一六歳の時に大学二年生(二三歳)の川端と婚約し、その一ヶ月後に突然婚約

破棄を告げた。その失恋体験は川端の生涯の転機となり、様々な作品に深い影響を与えた。

- (24) 長谷川泉「川端康成文学概説」(『川端文学―海外の評価―』早稲田大学出版部 一九六九・四)

- (25) 川端香男里「川端康成と『永遠の少女』」(『文芸春秋』二〇一四・八)

- (26) 川端康成「篝火」(『新小説』一九二四・三)

- (27) 川端康成「伊豆の踊子」(『文芸時代』一九二六・一／二)

- (28) 川端康成「非常」(『文芸春秋』一九二四・一二)

- (29) 川端康成「昭和十九年六月十五日日記」に、「文芸春秋社より、『一草一花』稿料三百六(十)十円速達にて着く。内税金四十三円三十(円) 銭差引。暫くぶりの稿料らしきもの。」と記されている。「十七歳」の執筆時期は一九四四

（昭和一九）年六月一五日直前だということが推測できる。

（30）川端康成「昭和十九年・昭和二十年 自由日記」（『川端康成全集』補卷一 新潮社 一九八四・四）

※本文引用は全て『川端康成全集』（全三五巻）第一巻（新潮社 一九八一・一〇）による。また、旧字は新字に改めた。
（りゅう・ぶんえん 青島科技大學講師・本學大学院博士後期課程）